

外国人看護師候補者支援に関わった看護師支援者の認識

—インタビューの結果から—

中村 悦子¹⁾・小島さやか¹⁾・岩崎 保之²⁾

1) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

The Viewpoint of a Nursing Support Staff Member, about Support for Foreign Nursing Assistants : Interview Results

Etsuko Nakamura,¹⁾ Sayaka Kojima,¹⁾ Yasuyuki Iwasaki²⁾

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

要旨

本研究は、外国人看護師候補者を受け入れた医療施設において、支援に関わった看護師支援者の支援の実際と成果に関する認識を明らかにすることを目的とした。対象者は看護師支援者4名であった。半構造化面接で調査を行い、K J法を用いて分析した。その結果、213のラベルから、【病院の教育支援の取り組みと試行錯誤】 【候補者のポジティブな意識の変化】 【受入れ側のポジティブな意識の変化】 【徐々に日本の生活に適応】 【国家試験問題の困難さと克服】 【協働者として期待するレベルとの差】 【時間を共有しながら意思疎通、相互理解へと変化】 【ポートフォリオの負担感と必要性】 の8つが統合された。

看護師支援者は支援の方法を工夫しながら関わり、外国人看護師候補者の成長過程を見守っていた。ポジティブな成長を認めながら、しかし、協働者としての視点では、日本語能力は実践レベルでは難しいと認識していた。

キーワード

外国人看護師候補者、看護師支援者、支援の方法、成果認識

Abstract

The present study has for its purpose a presentation of the viewpoint of a nursing support staff member, with respect to the support given to four foreign nursing assistants at a medical facility where they were employed, as well as the results of this support. The interview was done in a semi-structured way, and analyses were done according to the KJ method. The results showed that out of 213 labels, the following eight were the most integrated: “attempts and mistakes with respect to the educational support given at the hospital” “changes in the nursing assistants’ positive mindset”, “changes in the positive mindset of coworkers and supervisors”, “gradually becoming accustomed to life in Japan”, “the difficulty of questions on Japanese national license exams, and ways of overcoming this difficulty”, “the difference between their actual level, and the level expected by their coworkers”, “lack of mutual understanding despite time spent together, and changes toward mutual understanding”, and “the burdensomeness and necessity of the portfolio”.

The nursing support staff member adjusted her way of providing support to the foreign nursing assistants, and witnessed gradual growth in their abilities. Although the foreign nursing assistants improved over time, the opinions of many of their coworkers included the feeling that their present ability in the Japanese language was still insufficient.

Key words

foreign nursing assistant, nursing support staff, support technique, recognition of achievement

I 研究目的・背景

東南アジア諸国とのFTA（自由貿易協定）・EPA（経済連携協定）交渉をきっかけとして、日本において外国人看護師の就労が可能となった。しかし、我が国において外国人看護師が看護業務を行うには、日本の看護師国家資格取得が前提となっており、来日している外国人看護師候補者は3年間のうちに資格を取得できなければ、帰国を余儀なくされる。外国人看護師候補者の看護師国家試験合格に向けた自助努力はもちろんのこと、受け入れ医療施設は、看護師国家資格を取得し日本で就労することに期待をかけ、合格に向けた支援対策に取り組んでいる。

2008年8月にインドネシアより第一陣が104人来日している。2009年は173人であったが、2010年は39人、2011年は47人と減少傾向にある。2012年までにフィリピン人候補者を合わせると629人が来日している¹⁾。受け入れ施設数は、2008年度は47施設、2009年度は83施設でピークに達し、その後は減少し2012年度は15施設となっている²⁾。国家試験の合格率については、2009年は、合格者はいなかった。2010年は3人（1.2%）、2011年は16人（4%）、2012年は47人（11.3%）と徐々に合格率は上がってきているが、依然低迷している。合格率低迷の背景には、国家試験に必要な日本語能力を有していないと考えられ、厚生労働省では、国家試験における用語の見直しを行う有識者検討チームを設置した³⁾。

先行研究では、受け入れの実態について量的調査による報告がある^{4) 5) 6)}。九州大学アジア総合政策センターでは、第一陣のインドネシア人が配属になった病院と介護施設を対象に、受け入れの現状と課題を中心に調査を行っている。小川らによると、受け入れ理由では「国際貢献・交流の一環として協力」「職場を活性化させたい」が多く、受け入れでの職場の変化としては「日本人スタッフが

異なる文化を理解するきっかけ」が一番多かったと述べている。一方、「教育担当者の仕事量が増えた」「病院の財政的負担が大きくなった」「宗教面での配慮が必要となった」「日本人スタッフとの人間関係で調整が必要」など、国家試験合格と日本語教育、文化の違いというこれまでに経験したことのない仕事が増え、病院側の負担になっていると指摘している。受け入れ施設にとって、安に国際貢献・交流という理由だけで受けるには、人的、時間的、財政的負担が大きいと言える。

職能団体である日本看護協会の外国人看護師候補者受け入れに関する見解は、医療・看護の質を確保するために①日本の看護師国家試験を受験して看護師免許を取得すること②安全な看護ケアが実施できるだけの日本語の能力を有すること③日本で就業する場合には日本人看護師と同等以上の条件で雇用されること④看護師免許の相互承認は認めないこと、の4条件を示している。また、基本的スタンスは「自国の看護師不足を解消することを理由にして、安易に外国人看護師候補者を受け入れるべきではない」と述べ、慎重な姿勢をとっている⁸⁾。日本の看護の質、数の確保のために抜本的政策を議論すべきと考える一方で、現在、医療施設が受け入れ進行中である外国人看護師候補者の支援のあり方については、候補者の立場や、受け入れ医療施設側の立場にたって、その実態や成果を明らかにし、支援の方法やシステム構築を検討すべきと考える。

本研究の目的は、外国人看護師候補者受け入れ医療施設において、支援に関わった看護師の視点から、支援の実態や成果に関する認識を明らかにすることである。

II 用語の定義

1. 看護師支援者：外国人看護師候補者（以下、候補者）の支援に関わりあった指導的

立場の看護師。

2. 日本語能力：日本語の文字を認識し、読み、意味を理解して言葉として適切に使うことができる能力。

Ⅲ 研究方法

1. 研究対象

A県内の1施設に所属するインドネシア看護師候補者2名の支援に関わった看護師4名。

2. 外国人看護師候補者支援の概要

1) 雇用要件と業務

助手として雇用され、午前は配属病棟で業務に従事している。夜勤はない。業務内容は環境整備、配膳、車椅子移送など助手業務に限定される。

2) 学習支援

午後半日が学習時間にあてられている。専用の研究室で机、パソコンが用意されている。専任の指導者（看護師、非常勤）が、国家試験の学習支援や諸々の相談にのっている。その他、医師や看護師スタッフも国家試験の学習支援を行い、日本語の語学学習は専任の教師が訪問指導を行っている。厚生事業団からは国家試験学習支援として、受験対策講座をインターネット配信しオンデマンド講座やeラーニングによる自己学習に取り組むことができるよう整備されている。新潟青陵大学からの支援として病院の教育支援に参加型で参入し、ポートフォリオを使った動機づけ支援を行った。1年後のゴールを明らかにし、教員が3か月に1回の面接指導を行った。

3) 生活支援

アパートや生活必需品の準備は受け入れ施設が行っている。1人で生活している。

3. 調査方法

調査期間は2011年4月～2012年3月である。インタビューガイドに基づいて、個別に半構造化面接を行った。面接内容は、外国人

候補者の支援者としての関わり、支援の内容や方法、その成果について受け止めたこと、感じたことについて質問していった。面接時間は約40分、個室で行った。協力者の同意を得てICレコーダーにて録音した。

4. 分析方法

KJ法を用い質的に分析した。録音内容を逐語録として起こし、ラベルを作成した。ラベルの意味や類似性でグループ化し、グループの内容を現す一文を「表札」として記述した。グループを紙面上に配置し、図解し叙述化していく一連の作業工程を繰り返し行った。内容の妥当性については、表札をつけたグループのラベルを再度、研究者3人で確認し、4段階繰り返し行った。

5. 倫理的配慮

このデータは研究目的以外に使用されることはないこと、個人及び施設が特定されないよう配慮し、研究への協力は自由意志で、不参加による不利益が生じないことを口頭と文書で説明し、承諾を得た。また、研究途中であっても拒否することができることを保障した。終了後はデータの消去及びシュレッターにより処理されることについて説明した。

Ⅳ 結果

外国人候補者を受け入れての認識ラベルは213枚であった。ラベルの意味や類似性でグループにまとめ、グループの内容を現すような一文を記述し「表札」とした。グループの編成は4段階繰り返しながら「シンボルマーク」に統合された。その結果、表札21枚、シンボルマークは8つであった。8つのシンボルマーク間の関連図について図1に示した。また、8つのシンボルマークと表札、ラベルの一覧を表1-1、1-2に示した。

以下、シンボルマークは【】、表札『』、ラベル「」で示す。

表1-1 看護師支援者の外国人看護師候補者への関わりの実際

シンボルマーク	表札	主なラベルの内容
病院の教育支援の取り組みと試行錯誤	<p>国家試験の学習方法の工夫</p> <p>継続教育支援</p> <p>支援者としての役割不安</p>	<p>看護師の国家試験の自己採点をして、気が付いたので、9月の末までは広くいろんなことを学ばせる。で、10月の初めから国家試験の過去問題を基にしてやる予定です。</p> <p>とりあえず必修問題を一応終わったら、状況設定問題でやってみようかなとは思っているんです。問題の中にある漢字が私が書き出して提示し、確認させています。</p> <p>日本では看護師資格がなくても、もともと母国では資格があるので、技術を忘れないようにとって新人研修は必ず組み込んでいるんです。</p> <p>午前中働いていることが国試対策の勉強として実になったのかな、どうなのかなっていう不安はあります。勉強をしているそぶりも病棟では見られないから。ずっと助手業務ばかりしていて、国試に受かったら突然に看護師の仕事をするということになりますよね。</p>
候補者のポジティブな意識の変化	<p>異国での生活体験</p> <p>病院で働くことに積極的姿勢</p> <p>国家試験に合格したい</p>	<p>自分が外国に行く為には、（候補者として来日することが）一番手っ取り早い方法だったんじゃないですか。</p> <p>だから「遊ぶのはいいけど勉強もしないとね」って。「ゴールは国試に受かることなんだよ」って言うのと「いやいや、そんな集中して勉強できない」ってずっと言い続けて12月まで来たんですもん。</p> <p>試験に受かって（母国に）戻るかもしれません。</p> <p>初めての患者さんの名前を私たちに聞いて確認し、呼びかけてコミュニケーションを取ろうとする姿勢もあります。</p> <p>でも新しい処置、今日も胃ろう造設を見学してもらったんですけど、そういう新しいことを覚えたいという意欲はすごくありますよ。</p> <p>いよいよ、もう遊んでいる場合じゃないよみたいなことも言っておりました。</p> <p>Hさんはやっぱり合格したいという気持ちが強かったみたいで、（国家試験不合格に）かなりがっかりしていたんだななんて思いました。</p> <p>今後、彼はそんなに6時間も7時間も集中して毎日毎日することはできなくても、少なくとも今以上には勉強すると言っていました。</p>
受け入れ側のポジティブな意識の変化	候補者受け入れで変容する受け手側の意識	<p>（候補者を指導することで）やっぱり私たちの中で指導的な内容が入ってくるので、正確な看護、日本の看護を教えたいという意欲が高まったので、さらに団結力といいますか、まとまりがよくなったのではないかと感じます。</p> <p>外国の人って知ることなんてできませんもんね、彼らが来なかったら。</p> <p>モチベーションがどの程度高くなるかっていうのは、本人たちの問題でもあるので何とも言えないですね。楽しく…過ごせればいいのかと思ってみたりもします。</p>
徐々に日本の生活に適応	<p>自分の生活パターン</p> <p>日本の生活文化の知識はゼロからスタート</p> <p>母国との違いを理解する姿勢</p> <p>日本の生活を受け入れる</p>	<p>Hさんはちょっと内向的なのかな。もっとこう友達を作ってもっと日常生活が楽しくしてほしいなって私は思うんですけど、なかなか友達が作れない。だから、もうちょっと一歩自分から出ればいいのかになって思うところがあるんですけど。</p> <p>例えばHさんにお友達をつくってあげたいと思って、パーティーのときに、この人をとにかく遊びに連れてってあげてよとかいろいろ（病院職員に）声を掛けるんだけど、なかなか、その人とHさんが仲良くなるというまでいかない。</p> <p>Uさんはいろんなところに行きます。もともと来たときから、行動範囲が…最初は駄目でしたけど広いので。この週末も、〇〇（看護師支援者）さんのお友達に自分から電話をして県内の観光に行ってきたんです。</p> <p>Uさんは、帰ったら身の回りのことをしてお食事を作って食べて、それからお勉強して。でも寝るのは遅いんですね。で、4時半とかに起きてお祈りをするんです。お祈りの時間というのは決まっているわけです。</p> <p>アパートの、ふとんの敷き方から、ビッチリ教えましたよ。</p> <p>アパートの人のごあいさつとかも含めて、ごみの出す習慣も違いますよね。</p> <p>なんでここで謝るのかとか、なんでこういうことをするのかというのを、去年の夏頃からでしょうか、私以外にもほかのスタッフにも聞いていて。そういう積極的に日本の文化を取り入れようという姿勢が見られているので、それをまたどんどん吸収して出していますね。</p> <p>例えば、今日本では膿盆って使わないじゃないですか。なんだけど、あちらの国ではもう膿盆が全て、何をするにも膿盆を出すって言うんです。「何で日本は膿盆出さないの」って言われますね。</p> <p>彼らは日本が悪いとは思ってはいませんがね。あと、楽しい思いたくさんすればいいのになって思いますけどね。</p> <p>「ここは雪が降るから寒いよね」とか言うと、「いやいや、ここでいいんだ」みたいなこと言います。</p>

表1-2 看護師支援者の外国人看護師候補者への関わりの実際

シンボルマーク	表札	主なラベルの内容
国家試験問題の困難さと克服	<p>国の背景の違いによる国家試験問題の理解困難</p> <p>日本語の文字理解が困難</p> <p>国家試験合格への自信</p>	<p>疾患の種類がね、違うんですよ。だから、国家試験に出てくる問題で分からない疾患が結構あるんだなっていうのが気が付きました。</p> <p>日本は高齢者が多いから、老人看護に対する問題ってすごく多いんですよ。だから、彼らにはかなり難しいだろうなって思いました。</p> <p>英語だから分かるんじゃないと思うけどそうじゃないんですよ。私たちが発音している英語を片仮名で直しても分からない。</p> <p>試験に受かるには日本語がマスターできればいいのかなと思うんですが漢字がこれまた難しいんですよ。</p> <p>黄色という言葉が分からないから、「黄疸」と書いてあっても何のことも分からない。</p> <p>話していると、分かんなくても、結構分かったように聞いていて、実は分かんなかったという感じで。復唱してというと、もう復唱できないんですね。</p> <p>国家試験の過去問をやるにしても、正しいもの以外の選択肢がなぜ違うのかっていうのをちゃんと理解しないとほんとに分かったうちには入らないっていうのを言っていました。</p> <p>勉強に関しては、何とか来年は大丈夫だと2人とも思ってますけどね。</p>
協働者として期待するレベルとの差	<p>日本独特の音声による表現の理解困難</p> <p>日常的に会話を通じる</p> <p>実践レベルに達していない</p>	<p>日本語の難しいとこなんですけど二重否定の言葉とかいっぱいあるんですよ。しないわけではない、とか。</p> <p>音が出る擬音語はまだいいんですけど、今回の問題に「粘稠性の低いサラサラとした」という表現の問題が出たんですよ。だから、その粘調性が低いっていう言葉も分かんなかったしサラサラも分かんなかったと言うんですよ。</p> <p>何か言葉が通じるようになってきてからは、そこまで外国の方っていう感じではなくなってきたとは思いますが、話してると何かだんだん「あれ？」みたいなところで、ああ、言葉は難しいなっていう感じで認識をしたりします。</p> <p>日常的に使っている、私たちと一緒に使ってる言葉、病棟で使ってる言葉は分かります。</p> <p>コミュニケーション取るのはね、身振りでも手振りでもできますけどね。看護師として働くにはやっぱりまだ・・・。</p> <p>新人ナースは少なくとも日本語が使ってチャートができるので、彼らと同じレベルではないと思うんです。</p> <p>患者さんとのコミュニケーションは今のところできてますけど、働くとなると一人前の看護師ですから、看護記録も書かなければいけないし医師の指示も分らなきゃ駄目だし。</p>
時間を共有しながら意思疎通、相互理解へと変化	<p>スタッフとして信頼関係形成</p> <p>外国人という脅威の存在から受け入れへ変化</p>	<p>午前中だけでも一緒に業務をするっていうことだったりとか、感覚的な日本語とかがお互い通じるまでがすごい労力が必要なので、大変だなんていうのは正直あります。</p> <p>スタッフの中でちょっときつく注意をした人がいて、それをうさんがずいぶん悩んで、この人と関わりたくないと言ったことが一度ありましたが、それはもう克服しているし、今はいい関係が保てていると思います。</p> <p>だんだんと文字が読めてくると自分で必要なものがおそらく分かってくるし、すごくネットワークが広いのでいろいろな情報を取っているんですよ。</p> <p>悩んでいても、それこそなんか相談するとかたちは上の方には取ったかもしれないですけど、現場にはそういうのは出てこなかったです。</p> <p>スタッフとも1年一緒なので完全にコミュニケーション取れていますし、いろいろ聞けるといって、信頼関係もできてくるんじゃないかと思っています。</p> <p>私も説明しましたが特に高齢者の人って外国の人と接する機会なんていうのはそもそもない訳だから、もうそれ自体が脅威な訳だからねっていうことで彼女たちも理解したみたい。</p> <p>例えばベッドが英語のベッドみたいな、巻き舌みたいな感じになるときがあって、患者さんが聞き取れなくて「えっ？」みたいで何回か言い直して「ベッドの周り掃除します」ってようやく伝わる。少し発音の仕方でも苦労はしていますね。</p> <p>今は彼らが8階にいるってことが多くの人たちが知っているし、彼らももう普通にいます。全然です。私も廊下で彼女が、患者さんと話してる姿を、その売店に行く廊下で見ましたけど全然話してたし受け入れてくれているんだなって。</p>
ポートフォリオの負担感と必要性	<p>ポートフォリオの負担感</p> <p>ポートフォリオの必要性</p>	<p>彼らの中には、多分自分でこれをするって何かこうメリットがあるというふうにも思うよりはやらされてる感が強かったんじゃないかなっていう気がします。</p> <p>あんまり細かく書かせるのも彼らにとってはすごく負担なのです。</p> <p>これを書くのは、国試を合格するためのモチベーション管理のツールっていう意味合いよりは日本語のお勉強、宿題。</p> <p>初め（ポートフォリオ導入時）には見ましたが、あとコメント書くときにちょっと見ます。</p> <p>全体の教育プランを作って、何かを書かせるということは確かに大事かもしれませんがね。</p> <p>以前には一応目標立ててチェックするような用紙は作って、それを使っていたんですけども。何かやっぱりきちっと書いたものがありますね。</p>

1. 【病院の教育支援の取り組みと試行錯誤】

「最初は大ざっぱに学ばせ、後半は過去問題を中心に学ばせた」「必修問題が一応終わったら状況設定問題に移行する」と『国家試験の学習方法の工夫』をしていた。また、「看護師として専門的知識・技術の維持、向上のために新人ナース研修へ参加させる」をプログラムに入れ『継続教育支援』もしている。受け入れ職場においては「仕事が国家試験対策に効果があったか不安である」と直接の支援者である看護師は『支援者としての役割不安』をもっていた。3つの表札から統合された。

2. 【候補者のポジティブな意識の変化】

外国人候補者の来日目的について看護師支援者は「外国に行く、手っ取り早い方法だったと言っている」「ゴールは試験に受かること、と説明してもそんなに集中して勉強できないと言っている」「受かっても（母国に）戻るかもしれない」と述べており、外国人候補者に、国家資格を取って日本で働くという強い意識はみられず、『異国での生活体験』そのものが来日目的だったのでは、と看護師支援者は捉えている。しかし、受け入れ医療施設側の教育支援を受け、外国人候補者の就労姿勢に変化が見られ、「患者に呼びかけてコミュニケーションをとろうとする」「新しい処置に対して覚えたいという意識はある」など『病院で働くことに積極的姿勢』を示すようになったと捉えている。また、「遊んでいる場合じゃないと言うようになった」「合格したい気持ちが強くなったと言っている」「少なくとも今以上に勉強すると言っている」など『国家試験に合格したい』気持ちへと変わっていった、と認識している。3つの表札から統合された。

3. 【受け入れ側のポジティブな意識の変化】

受け入れ側の意識は「この機会がなければ、外国の人を知らなかった」「日本の看護を教えたいという意欲が高まった」「モチ

ベーションは本人の問題」など『外国人候補者受入れで、変容する受けて側の意欲』もみられている。1つの表札をシンボルマークとした。

4. 【徐々に日本の生活に適応】

生活のあり方は、候補者の性格にもよる。Hさんは「行動範囲が広くない」「積極的に友達を作ってあげたいが、なかなか打ち解けるに至らない」など内向的な性格と捉え、Uさんは「行動範囲が広く、週末にはお友達のところ遊びに行く」など外交的な性格と捉えている。また「お祈りの時間は守って、宗教的な生活は日本でも続けている」と、それぞれの『自分の生活パターン』をもっていると認識していた。

生活においては「布団の敷き方から教える」「アパートの人との挨拶の仕方やごみだしについても教える」など『日本の生活文化の知識はゼロからスタート』であった。「謝り方などについてスタッフに質問する」「処置後の材料の処理方法を聞く」など『母国との違いを理解する姿勢』もみられ、「日本は悪いところとは思っていない」「この土地はいいところだ」と『日本の生活を受け入れる』ようになったと認識している。4つの表札から統合された。

5. 【国家試験問題の困難さと克服】

「国による疾患の特性の違いからくる理解の困難さ」「老人看護の難しさ」などがあると述べており、『国の背景の違いによる国家試験問題の理解困難』があると捉えている。「英語をカタカナで書かれるとわからない」「漢字が覚えられない」「黄疸がわからない」など『日本語の文字理解が困難』と認識していた。「わからなくてもわかったように聞いている」など理解について不安定さも残るが、「国家試験問題の正答だけでなく他の解答についても理解を深めている」「来年は合格すると2人とも思っている」など、学習の前向きな姿勢から、看護師支援者自身にも『国家

試験合格への自信』が見えた。3つの表札から統合された。

6. 【協働者として期待するレベルとの差】

日本語の言葉として「二重否定がわからない」「擬態語がわからない」など『日本独特の音声による表現の理解困難』の状態から「言葉が通じるようになってから外国人という感じが無い」「日常的な言葉はわかる」と『日常的に会話を通じる』までになっていると認識していた。しかし、「わかっていたと思って話をしているといつの間にか食い違っている」「コミュニケーションは看護師として働くには不十分」など、日本語の能力の上達を認めながらも、協働するには実践レベルでの期待には届かず、日本語能力は『実践レベルに達していない』と認識していた。3つの表札から統合された。

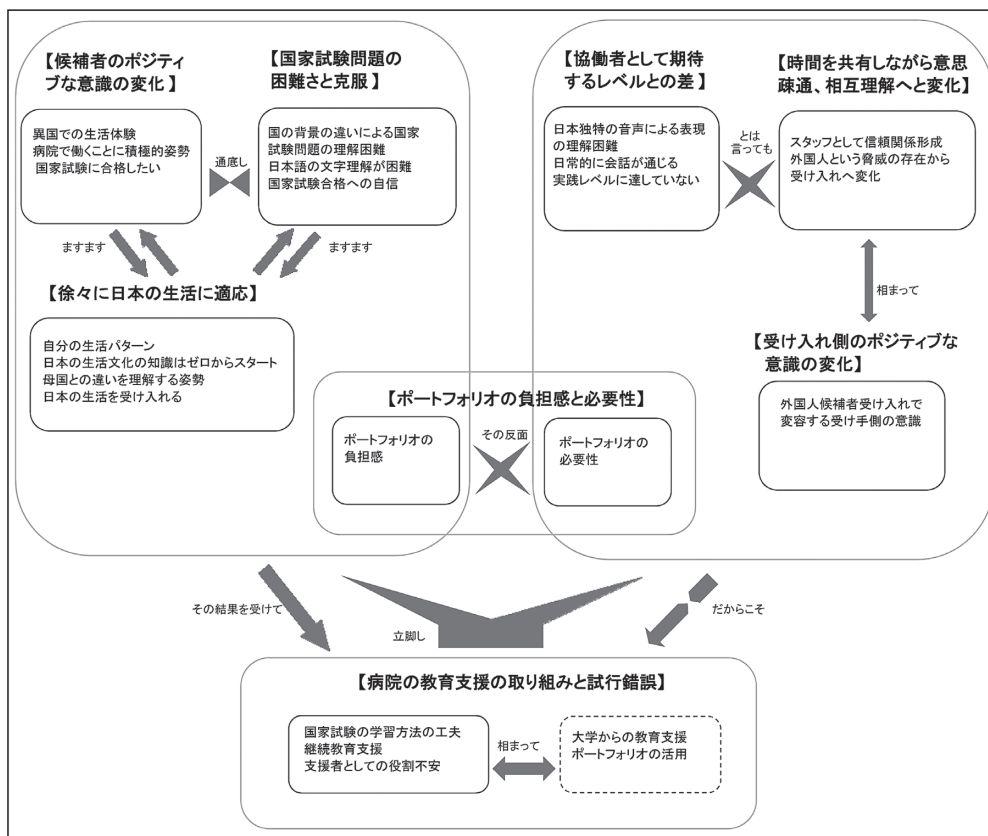
7. 【時間を共有しながら意思疎通、相互理解へと変化】

「日本語がお互いに通じるまでに労力が必

要である」「ナースから注意を受け、このスタッフとの関わりを拒否した」「文字が読めてくると自分で必要なものがおそらくわかってくる」「本音を出さない」「1年間、一緒に信頼関係できている」など、日本語による会話では意思疎通という点で難しいところがあるが、『スタッフとの信頼関係形成』に至っていると認識している。患者については「患者、特に高齢者は外国人と接する機会がなく、外国人というだけで脅威である」「巻き舌で話すと患者は聞き取れない」というネガティブな認識から、今では「患者さんも受け入れ、楽しそう」と、患者にとっても『外国人という脅威の存在から受け入れへ変化』してきていると捉えている。2つの表札から統合された。

8. 【ポートフォリオの負担感と必要性】

「ポートフォリオは、やらされ感が強い」「細かく書くのは負担」「日本語の勉強、宿題と思っている」と、外国人候補者が一人で



【図1】 看護師支援者の外国人看護師候補者支援の実際と成果の認識 (ラベル213枚)

日本語を書くことに対し負担感があったと捉えている。『ポートフォリオの負担感』とした。一方、支援者からは「書くことは大事である」「きちっと書いたものが必要である」「コメント書くときに見ている」と述べていることから『ポートフォリオの必要性』とした。2つの表札から統合された。

V 考察

1. 支援のポイントは「国家試験合格に向けた取り組み」

「国家試験に合格しなければ、日本で看護師として就労できない」という要件がある。1年後の目標は、看護師国家試験合格を目指すことである。第一陣の外国人看護師候補者を受けた医療施設の看護管理者は「国家試験に合格するまでは、看護の人材として求めずに、勉強に重点をおいた。1日の半日を学習時間に当て、病院職員の医師やスタッフを支援者とした⁹⁾とその支援の実際を述べている。本研究の協力施設においても、午前は勤務、午後は学習時間にあて、専任の指導者がついていた。看護師支援者は、実際の指導で「最初は大ざっぱに学ばせ、後半は過去問題を中心に学ばせた」「必修問題が一応終わったら状況設定問題に移行する」など『国家試験の学習方法の工夫』をしていた。しかし、「国による疾患の特性の違いからくる理解の困難さ」「老人看護の難しさ」など『国の背景の違いによる国家試験問題の理解困難』があると同時に、「英語をカタカナで書かれるとわからない」「漢字が覚えられない」「黄疸がわからない」など『日本語の文字理解が困難』という問題にぶつかっていた。職場において指導者として直接関わりあった看護師は「仕事为国家試験対策に効果があったか不安である」と『支援者としての役割不安』を抱いていた。初めて外国人を受け入れ、国家試験に合格させるという目的の中で、言葉や生

活文化の違いが学習指導にも影響を与えていた。

2. 外国人看護師候補者の成長に向き合う

外国人候補者の来日目的について看護師支援者は「外国に行く、手っ取り早い方法だと言っている」「ゴールは試験に受かること、と説明してもそんなに集中して勉強できないと言っている」「受かっても(母国に)戻るかもしれない」と述べており、外国人候補者は、看護師の国家資格を取得しても日本で働くという強い意識はないのでは、と看護師支援者の受け止めはネガティブである。来日動機について、平野らは「自分のキャリアをのばしたいから」が一番多く、ついで「家族を経済的に支援したいから」「日本での経験を、将来他国の病院や施設で活かしたいから」であったと報告している。本研究協力施設においても同じような傾向があるのではないかと推察された。外国人候補者の来日目的が『異国での生活体験』であることに対し、受け入れ医療施設は、国家試験に合格させて日本で就労できるようにすることを目的としており、その意識に差が生じていた。しかし、「患者に呼びかけてコミュニケーションをとろうとする」「新しい処置に対して覚えたいという意識はある」など、候補者の『病院で働くことに積極的姿勢』もみえるようになり、「遊んでいる場合じゃないと言うようになった」「合格したい気持ちが強くなったと言っている」「少なくとも今以上に勉強すると言っている」など『国家試験に合格したい』という気持ちへと変わってきていることを認識している。

外国人候補者の国家試験学習の取り組み状況においても、『国の背景の違いによる国家試験問題の理解困難』『日本語の文字理解が困難』から、「国家試験問題の正答だけでなく他の解答についても理解を深めている」「来年は合格すると2人とも思っている」など、候補者の前向きな学習姿勢から看護師支援者

にも『国家試験合格への自信』が見えてきている。候補者と関わりあいながら、彼らの成長を感じており【候補者のポジティブな意識の変化】を認識していた。

3. 受け入れ医療施設の中に变化

外国人候補者とスタッフとの関連では「日本語がお互に通じるまでに労力が必要である」「ナースから注意を受け、このスタッフとの関わりを拒否した」「文字が読めてくると自分で必要なものがおそらくわかってくる」「本音を出さない」「1年間、一緒に信頼関係できている」など、日本語による会話だけでなく、時間を共有することにより、互いを理解しあう関係ができてきたと『スタッフとの信頼関係形成』に至っていると認識している。患者との関係では「患者、特に高齢者は外国人と接する機会がなく、外国人というだけで脅威である」「巻き舌で話す患者は聞き取れない」と患者の外国人の受け入れに抵抗感も当初あったが、「患者さんも受け入れ、楽しそう」と患者も『外国人という脅威の存在から受け入れへ変化』と受け止めていた。

また、候補者を受け入れたことにより職場にどのような変化をもたらすかについて、小川らは「日本人スタッフが異なる文化を理解するきっかけとなった」「職場が活性化」などをあげている。本研究協力施設においても「この機会がなければ、外国の人を知らなかった」「日本の看護を教えたいという意欲が高まった」など『外国人候補者受け入れで、変容する受けて側の意欲』と、まわりの人々、職場全体にポジティブな影響をもたらしていると認識していた。

4. 協働者としての視点

候補者の【徐々に日本の生活に適応】【候補者のポジティブな意識の変化】【国家試験問題の困難さと克服】と前向きな変化・成長が見られ、看護師支援者は支援の成果を感じとっていた。また、日本語の言葉として「二

重否定がわからない」「擬態語がわからない」など『日本独特の音声による表現の理解困難』の状態から「言葉が通じるようになってから外国人という感じが無い」「日常的な言葉はわかる」と『日常的に会話を通じる』までになってきていると良い変化を感じている。しかし、「わかっていたと思って話をしているといつの間にか食い違っている」「コミュニケーションは看護師として働くには不十分」など、日本語の能力の上達を認めながらも、協働するには、日本語能力は『実践レベルに達していない』と認識している。【協働者として期待するレベルとの差】を国家試験合格後、同僚者としてどのように協働していけるのかが問題となる。職場配置の問題が現実味を帯びてきている。

堀田¹²⁾らは、「看護職者の外国人看護師との協働に対する意識調査」で、自分自身の職場での協働に関し、賛成、反対が、ほぼ同数であったと報告している。受け入れることに反対ではないが、意思疎通が十分でないことへの不安が、このような結果になったのではと推察する。外国人看護師との協働について、「言語の理解」は、避けて通れない課題である。

VI 結論

受け入れ医療施設の看護師支援者は、国家試験合格に向けた支援に重点をおき、方法の工夫をしながら関わり、外国人看護師候補者の成長過程を見守っていた。そしてポジティブな成長を認めながら、しかし、協働者としての視点では、日本語能力は実践レベルでは難しいと認識していた。

謝辞

本研究にご協力いただいたA県内の医療施設の外国人看護師候補者ならびに看護師支援者の方々に心から感謝申し上げます。

付記

この研究は2011年度新潟青陵大学共同研究費助成を受けている。

引用文献

- 1) 厚生労働省. インドネシア人、フィリピン人看護師、介護福祉士候補者の受け入れについて. <<http://www.mblw.go.jp/bunya/koyou/other22/>>. 2012. 11. 28.
- 2) 厚生事業団. 平成25年度版EPAに基づく外国人看護師、介護福祉士受け入れパンフレット. <<http://www.jicwels.or.jp/files/H25E5B9B4E5BAA6E78988>>. 2012. 11. 28.
- 3) 河原論. 経済連携協定に基づく外国人看護師候補者の受け入れについて. 看護. 2010;62(12):68-71.
- 4) 小川玲子、平野裕子、川口貞親ほか. 来日第一陣のインドネシア人看護師・介護福祉士候補者を受け入れた全国の病院・介護施設に対する追跡調査(第一報)—受け入れの現状と課題を中心に—. 九州大学アジア総合政策センター紀要. 2010;5:85-98.
- 5) 平野裕子、小川玲子、大野俊. 2国間経済連携協定に基づいて来日するインドネシア人およびフィリピン人看護師候補者に対する比較調査—社会経済的属性と来日動機に関する配布票結果を中心に—. 九州大学アジア総合政策センター紀要. 2010;5:153-162.
- 6) 川口貞親、平野裕子、大野俊. 日本の全国病院における外国人看護師受け入れに関する調査(第3報). 九州大学アジア総合政策センター紀要. 2010;5:147-151.
- 7) 前傾4) 88-90.
- 8) 小川忍. 外国人看護師候補者受け入れに関する日本看護協会の基本的スタンスについて. 看護. 2010;62(12):72-73.
- 9) 日本看護協会編集部. 受け入れ施設の支援の実際. 看護. 2010;62(12):76-77.
- 10) 前傾5) 157.

11) 前傾4) 89.

12) 堀田かおり、丹野かほる. 外国人看護師受け入れに関する研究—看護職者の外国人看護師との協働に対する意識調査—. 第39回看護総合. 2008:107-109.

文献一覧

- 金子八重子、石井敦子、松本千香江ほか. スタッフが成長を実感できるポートフォリオの活用. 看護展望. 2011:20-27.
- 大関信子. 看護教育にポートフォリオの導入を. Quality Nursing. 2000;6(3):52-53.
- 鈴木敏恵. 看護師の実践力と課題解決力を実現する! ポートフォリオとプロジェクト学習. 14. 東京:医学書院;2010.
- 杉浦絹子. 異文化看護能力の現状と規定要因—青年海外協力隊看護職帰国隊員と効率総合病院勤務看護職比較より—. 日本看護科学会誌. 2003;23(3):34.
- 山浦晴男. 科学的な質的研究のための質的統合法(KJ法)と考察法の理論と技術. 看護研究. 2008;41(1):11-32.
- 松岡緑. 看護での外国人労働者受け入れについて. 教育と医学. 2005;53(3):284-287.